コミュニティにおけるソーシャルワーク力強化研修・長野 2021 ダイジェスト

令和３年
9月1日(水)～3日(金)　会場　オンライン(Zoom)

CONTENTS

02 開催趣旨
オープニングトークセッション
03 講義Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
04 ナイトトークセッション
COVID-19の予防と地域活動
デルタ株流行状況を踏まえて
06 シンポジウム
地域共生社会の実現とSDGsの展開、そしてグリーン・ソーシャルワーク
12 演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
13 特別講義
フューチャーデザインとソーシャルワーク
未来人になって考えるこれからの社会と価値
演習
「将来世代」になって、未来のソーシャルワークを考えよう
15 レポート
クロージングナラティブ
16 受講者の事後課題より

地域共生応援大使
ふっころ

主催　社会福祉法人長野県社会福祉協議会

赤い羽根共同募金
配分金助成事業

開催目的

新型コロナウイルス感染症の終息が見通せないなか、人々は今もって制限された行動を余儀なくされ、これまであたり前だった行動様式にも変化が見られています。

また、行動の抑制は経済にも大きな影響を及ぼし、支援を必要とする人が増加していますが、様々な緊急支援策でも真の福祉課題は表に現れにくく、コロナ禍における相談支援への限界や手詰まり感、相談援助者としてのマインド維持に悩む現状があります。

しかし、今の社会に向き合い、こうした状況下だからこそ担うべき役割を自覚し、相談援助の手法を新たに獲得することが、まさにソーシャルワークに求められる価値と理念に基づく実践であると信じています。

社会変化の過程のなか、改めてソーシャルワークの理念、価値、知識、方法、技術などを学び、ミクロ、メゾ、マクロに働きかけるソーシャルワークの実践力を養い、個別のワーカーとして、そして各組織のソーシャルワーク機能を高めることを本研修の目的とします。

「コミュニティにおけるソーシャルワーク力強化研修・長野 2021」開催要領より

1st day　9月1日（水）

オープニングトークセッション

上野谷 加代子 氏　同志社大学 名誉教授

空閑 浩人 氏　同志社大学 社会学部教授

事例提供者

蒲生 俊宣 氏
上田市川西地域
包括支援センター

柴田 裕美 氏
諏訪市社会福祉協議会

佐藤 もも子 氏
東御市社会福祉協議会

グラフィック・レコーディング

西澤 智美 氏　箕輪町社会福祉協議会

講　義

講義 I　個の理解とエンパワメント
ミクロソーシャルワークを理解する

川島ゆり子 氏
日本福祉大学
社会福祉学部 教授

社会的孤立の課題は地域で暮らす全世代にわたる課題だからこそ、自ら支援につながろうとしない人ももれ落とさず、寄り添い支え続ける丁寧な総合相談支援体制が求められています。

本講義では、コミュニティソーシャルワークにおける個別支援実践の重要な柱であるアセスメントに焦点を当てています。アセスメントの軸をソーシャルワーカーがしっかりともち、本人の主訴や表面的な課題にのみ目を向けるのではなく、支援を拒否する場合も、その背景を視野に入れ、多角的に本人理解を深めていく必要があります。また、世帯全体を視野に入れたファミリーソーシャルワークを展開するために、家族のシステム的理解も求められます。

本人が自分自身の変化をもたらす力のある人だと信じ、その変化を支え続ける実践力を磨いていくことを目指します。

講義 II　地域組織アセスメントとグループ・ダイナミクス
マクロソーシャルワークを理解する

黒木 保博 氏
同志社大学
名誉教授
長野大学
社会福祉学部教授

ジェネラリスト・ソーシャルワークでは、「地域組織」を「マルチパーソン・クライエントシステム」、即ち、家族、小集団、組織、施設、機関等としています。また、「メゾレベル」は、住民組織のあつまりにアプローチし、地域社会の独特の文化･風習、意識をターゲットにする実践としています。

いずれも、そこには「グループ」が存在する。グループが個人に与える「影響力」は大きく、一人のメンバーは他のメンバー達の相互関係に反応し、それを考慮に入れつつ自分の行動を決めている傾向があります。

このグループが持つ力動性を重視し、着目して、現状変化をめざすのが「グループダイナミックス」です。見方や考え方を変えたり、情緒的支持をしたり、行動を修正させるグループの「力」を実践にどのように活用できるかをぜひ理解して下さい。

講義 III　社会資源開発とソーシャルアクション
住民の学びと福祉教育を考える

空閑 浩人 氏
同志社大学
社会学部教授

本講義では、ミクロ、メゾ、マクロレベルの実践が連動するソーシャルワークについて、主にマクロレベルに焦点を当てて話をしました。大切なことは、マクロレベルの実践が決してミクロやメゾレベルのそれと切り離されたものではなく、相互に連動し、循環するという理解です。

社会や地域を変えたければ、まずは私たち専門職自身が、私たちが所属する施設や機関が変わることが大切です。その変化に連動しながら、地域も社会も変わっていくのだと思います。一人のソーシャルワーカーとして、そして一つの施設や機関として、他者にそして地域に「常に開かれている」こと、そして、人々と「ともに」を忘れないことが大切だと思います。

「S：ソーシャルワークは、D：誰かと一緒に、G：元気になる、S：仕事」なのです。

ナイトトークセッション

COVID-19の予防と地域活動

デルタ株流行状況を踏まえて

高木 宏明 氏　諏訪中央病院 副院長

私は病院でコロナ対策の責任者もしていますので現場の感覚を踏まえて情報提供ができればと思います。

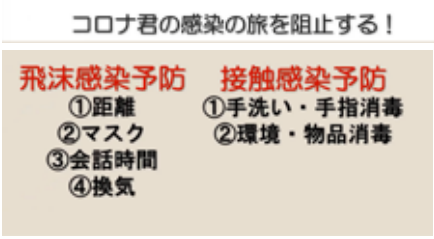
今回の新型ウイルスの感染症の騒ぎのように、近年パンデミックの起きる間隔が短くなっています。約100年前にスペイン風邪が流行し、2000年に入ってからはサーズ、新型インフルエンザ、マーズ、今回の新型コロナといったように次々と起きています。

歴史をちょっと振り返ると、これまで人類は何度もパンデミックを経験していながら、そこから学んでいないと考えます。パンデミックは繰り返されます。これからも来ます。ですから、コロナが終わってやれやれこれで大丈夫と思ったらまた来ます。ですから今回私たちはこの経過を記憶に残して、次の世代に伝え、今後も起こるであろうパンデミックに備えていかねばならないと思っています。

飛沫感染を予防する四つのポイント

コロナ感染を防ぐには、人から人へのウイルスの感染の旅を途中で遮ることが必要です。今回の内容は*福祉21茅野のパンフレットにもまとめていますのでご参照ください。茅野市のホームページからダウンロードできます。

ご存知のようにコロナウイルスは飛沫に混じって飛び出します。それが口や鼻に入ることをどうやって防ぐかです。飛沫感染を予防するには、私は四つをあげて説明しています。それは①距離 ②マスク ③時間 ④換気です。



一つ目は距離です。2m 以上離れていれば飛沫は飛んできません。

二つ目はマスクです。不織布のサージカルマスクは、マスクをして吐き出す飛沫を出す量が22% で、吸い込む量は30% に抑えられ、一番効果が高いです。次いで布マスク、ウレタンマスクとだんだん数字が悪くなります。

正しくつけることも大事です。あごまでかけ、ワイヤーを鼻の形に合わせて隙間を作らないことです。

三つ目は会話時間です。距離1m 以内で二人ともマスクなしで15分以上会話をしたというのが濃厚接触の定義です。今はほとんどマスクをしているので、濃厚接触は少ないのですが、家庭は濃厚接触が起きる場です。もう一つは会食の場面です。

なぜ15分以上かというと、ウイルスがある程度以上入らないと感染が成立しません。ただしデルタ株はもう少し短い時間で感染が成立しそうなので、会話時間はもっと短くした方がいいです。

四つ目は換気です。大体30分に1回ぐらいです。冬も同様で、数分間、窓を対角線上に開けるのが一番良いとされてます。空気の流れがあることが感染予防の大事な要素の一つとなります。

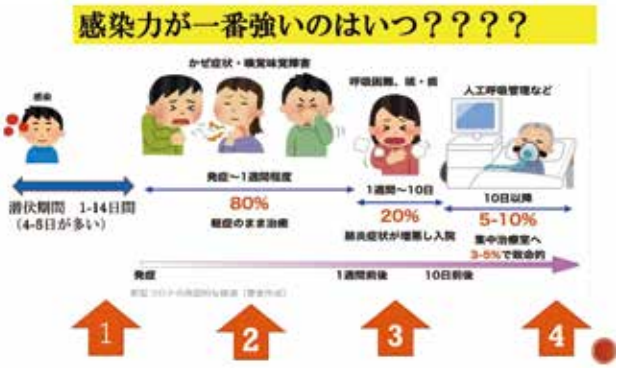
外出時はリスクを見積もりして行動する

デルタ株に対抗するには、新しいことは何もありません。距離、マスク、時間、換気、この4つは覚えておいてください。

自分がどこへ行って何をするかを考えた場合に、見積もりをして行動することが大事です。ここにはどういう人たちがいて、どれぐらいの距離感で過ごすのか、どれくらい会話がされるのか、いったいこの場は何時間の場なのか、換気はどうなのか、この場は大丈夫かを見積もってください。どこへ行ってもリスクは絶対ゼロにはなりませんが、そのリスクを自分で下げることは可能です。

接触感染を予防する手洗いと手指消毒

次に手を介した接触感染の予防は、手洗い・手指消毒になります。お店など



*福祉21茅野(茅野市の21世紀の福祉を創る会) が作成したコロナの特性、感染予防などの説明をまとめたパンフレット「コロナ君、感染の旅をゆく」
茅野市ホームページ https://www.city.chino.lg.jp/site/korona/coronakun.html

で消毒する時に手に水たまりができるぐらいアルコールを取り、しっかりこすってください。持ち帰らないために出ていく時もやった方がいいです。

スーパーなどで買って帰った商品で感染した事例報告はありません。むしろ帰った時になすべきことはまず第一に手を洗うことです。石鹸と流水ないしはアルコールで手をきれいにして、家の中のことをしていただく。予防はほぼ手洗いに尽きます。

熱や症状のあるなしではなく行動の背景を確認する

感染力が強いのは症状がない時ですから、熱のあるなしでサービスを提供するかどうかを決めてはいけません。それよりも背景をきちんと確認することです。

つまり誰かの濃厚接触者になっていないか、最近会食をしていないか、どこか流行地に出かけていないか、そこで不用意な行動をとっていないかということの方が大事です。

飲食の場面は濃厚接触になりやすいのでご注意ください。家族やいつも仕事している人と一緒に食事に行くのならリスクは低いですが、普段あまり接触しない第三者と会食するのは避けた方がいい。デルタ株は増殖もしやすく感染力が強く広がりやすいので、家の中に持ち帰らないことがとても大事になります。

喫煙者は中等症になりやすい

病院に入院され、中等症で酸素を吸う方はほぼ皆さんタバコ吸っているか、喫煙歴があります。あとは糖尿病の方と肥満体の方は重症化しやすい。入院された方たちはタバコを吸っていたり、喫煙歴があったりする方が多いので、タバコは今からでも止めていただけると良いと思います。

ワクチンは打っても感染しないわけではなく、感染しても重症化しないというメリットはあります。やることは同じで引き続き感染防御をして、自分のワクチンの順番が回ってくるのを待ちましょう。

ギターの弾き語りで受講者にエールを送る高木氏

参加者のチャット Q&A

参加者からチャットの質問です。

「コロナはいつ収束しますか」

100年前のスペインインフルエンザの時は大体3年かかってます。自然に消えていきました。ウイルスにとって一番生き延びやすいのはほどほどに悪くして飛沫を出させることが一番なので、早々に殺してしまったら自分たちも滅んでしまうのでどこかに落ち着く。おそらくは今までの人類の経験で言うと3年ぐらいです。そうなってくれることを祈っています。

その間に怖いのが慣れです。基本的な感染防御の方法を多くの方に知っていただいて行って頂きたいなと思います。

「サウナや温泉は行ってもいいですか?」

公共の温泉の浴室はリスクが低いと言われています。危ないのは更衣室と休憩室です。会話もほどほどに、マスクなしでおしゃべりや飲食しないよう注意が必要です。

デルタ株は増殖もしやすく感染力が強く広がりやすいので、家の中に持ち帰らないことがとても大事になります。

「空気感染とは飛沫感染のことですか?」

空気感染は粒が細く小さいので長いこと空中を飛ぶので飛沫感染よりも怖いです。リスクをゼロにすることはできないのですが、距離とマスクと時間、換気、そして手洗いをしていればリスクは下がるはずです。

「抗体検査で陰性でしたら PCR 検査を受けなくても大丈夫ですか」

最近出た論文で無症状の人に PCR 検査をしても意味がないというデータが出ているので、症状もないのに検査を受けることはお勧めしません。逆に私たちは症状があって感染が疑われて PCR 検査をして、それがたとえ陰性でも、日を改めてしつこく検査をします。そうした臨床判断、アセスメントを大事にしています。

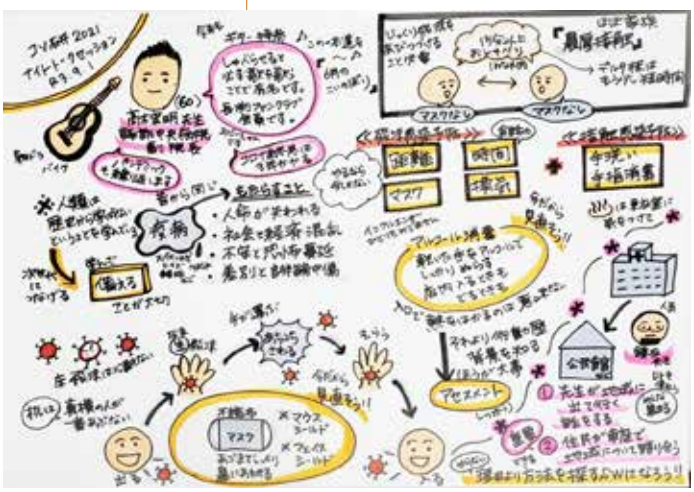
地域活動ができない理由よりできる方法を探す人になる

「サロンなどの地域活動はしてもいいでしょうか?」

リスクゼロは難しいけれど必要とする人がいるのであれば、主催者とどうすれば少しでも感染を減らすことができるかを話し合い、飛沫感染予防の四つの項目プラス手洗いを徹底してください。

もし自分たちで力不足だと思ったら良い医師を巻き込んでください。知り合いのソーシャルワーカーに言わせると、地域の人たちは自分よりも医者の言うことはよく聞くそうですから。いかに上手に機嫌よく医者を乗せることができるか。それもソーシャルワーカーの力量の一つだと思います。

やれない理由をいろいろと挙げる人は結局はそれをやりたくないのです。やりたくない人は理由を探します。でもやらなければいけないと思っている人たちは方法を探す人たちです。どうしたらやれるか方法を探し、方略を工夫します。皆さんには地域ではそういう存在になっていただきたいと思います。



※この内容は講演当時の知見に基づくものです。その後、さらに知見が深まっていることから、活用にあたっては確認が必要です。

シンポジウム

地域共生社会の実現とSDGsの展開、そしてグリーン・ソーシャルワーク

原田 正樹 氏　日本福祉大学社会福祉学部 教授
新田 英理子 氏　一般社団法人 SDGs 市民社会ネットワーク 理事・事務局長
コーディネーター
上野谷 加代子 氏　同志社大学 名誉教授

上野谷：本日のシンポジウムではマクロの部分から物事を俯瞰し、これから生まれてくる子どもたちに恥ずかしくない地球を、地域を、あるいは福祉政策を残すことができるのか、考えてみたいと思います。

始めに地域共生社会の現状と課題を原田先生にお話いただき、新田さんからはSDGsについてグローバルな話をしていただきます。私からはグリーン・ソーシャルワークについてお話しします。それを踏まえた上でどうすればミクロ・メゾ・マクロの循環ができるか。マクロから考えたり、ミクロから考えたりすることが同一地平に並ぶ話ができればと思います。

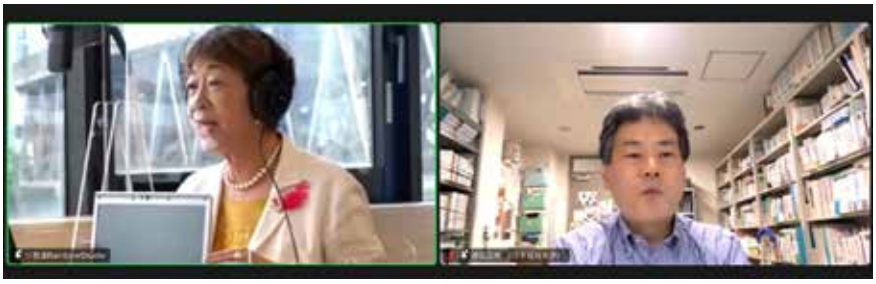
◉地域共生社会の現在地◉

コロナ禍の地域福祉

原田：コロナ禍になって世の中では感染防止か経済活動かの二者択一の議論がされています。感染対策が行き過ぎてしまうと隔離を生み、経済支援が遅れれば困窮を生んでしまいます。この二つが回らないと社会は分断されてしまいます。分断されない社会にするために、多様性を認められる新しいつながりを私たちはどうつくっていくのかが今問われています。

コロナ禍の中で福祉や医療現場への風評被害や誹謗中傷、同調圧力などの問題が起きていると考えられます。

ある施設がクラスターを起こすと、その施設は出ていけとか、あるいは認知症の人や障がいのある人たちは感染させる危険性があるから家から出るなと言われてしまうケースがありました。ある地域ではコロナの感染者が出たことでご近所から石を投げ込まれ、結局引っ越さざるを得なくなったという話を伺いました。



上野谷加代子 氏　　原田正樹 氏

感染したのは自己責任で対策をしなかった悪い人であり、そんな人のせいで迷惑をかけられたくないという意識が強く働き、様々な問題が起こっています。

あなたのまちで やさしさをひろげるために

そうした状況を考えるほど、地域共生社会の実現を目指してきたけれども、日本はいつになったら共生社会と言えるのか。そこで全国社会福祉協議会では昨年、コロナでの差別や偏見に対して福祉教育の展開をするため、全社協版『あなたのまちでやさしさをひろげるために』という教材を開発しました。

元は日本赤十字社の「新型コロナウイルスの三つの顔を知ろう」というリーレットです。新型コロナウイルスには病気・不安・差別という三つの顔があり、その負のスパイラルを断ち切ることが大事だというわかりやすいメッセージです。

それを受けて全社協としては福祉の視点で、「病気・不安・差別」という三つの顔を「健康・安心・共に生きる」というストレングスの顔に変え、負のスパイラルではなく、良い循環を地域の中で作っていこうと考えました（図1）。

教材は具体的なワークシートになっています。もしも感染した時に周りの人から言われたら悲しい言葉、嬉しい言葉ってなんだろう、といった子どもたちにもわかりやすいシートがたくさんあります。

その中で、健康とは単に病気や虚弱ではないだけでなく、肉体的、精神的、社会的に調和のとれた良い状態にあることを解説しています。WHOのウェルビーイングの規定で健康の概念です。

コロナ禍での差別や偏見にソーシャル

＊新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう！　諏訪赤十字病院臨床心理課長の森光氏が監修し、日本赤十字社本社が発行したリーフレット。

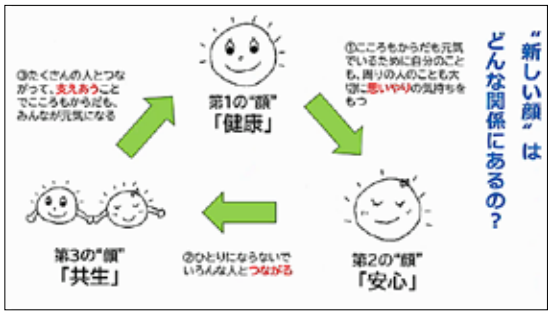


図１『あなたのまちでやさしさをひろげるために』より

ワーカーがしっかりと向き合いながら、一人ひとりの健康だけでなくて、地域みんなの健康を考えるというアプローチを考えていくことも大事であると思っています。

権利としての地域共生社会の理念

ここで見直していただきたいことが、地域共生社会の理念です。

「支え手側と受け手側に分かれるのではなく、地域のあらゆる住民が役割を持ち、支え合いながら自分らしく活躍できる地域コミュニティ」。これを地域共生社会の中で作っていく。「支え手側と受け手側に分かれるのではなく」を深読みすると、2000年の基礎構造改革において、社会福祉は市場化を認めました。

気がつけば我々は、相手を利用者と呼び、サービスの提供者と利用者にはっきりと分けてしまったのではないか。サービスはとても大事だけれど、果たして福祉とはサービスだけだったのだろうか。こうしたことも問わなければいけないでしょう。

「地域のあらゆる住民が役割を持つ」とは、重度の障がいがある人も認知症や寝たきりになった高齢者等もあらゆる住民が役割を持っているということです。かつそうした人々が支え合いながら自分らしく活躍できる地域コミュニティをつくり、これを権利としての地域共生社会に組み変えていく必要があります。

ケアリングコミュニティと自立

「支え合う地域社会」は、まさにケアリングコミュニティ*であり、そこでは自立の考え方が重要なポイントになります。

自立はソーシャルワークの中でも大事な目標になりますが、その考え方が時代とともに少しずつ変わってきています。依存はよくないから自立できるようにするというだけではなくて、最近はインターディペンデンス（相互依存）の関係性の中で自立を問うことの重要性が指摘されてきました。

自立といっても人間はそれほど強い存在ではなく、人間の弱さを肯定的に認めて、自己実現ではなく相互実現として、お互いがよりよく生きていく関わりや関係性の中で自立を捉えていく。そんな自立感を考えたらどうかという視点です。

相互実現は助けられ上手になること

市町村社協のボラセンの前身である善意銀行を作られた木谷宜広氏が「ボランティアは相互実現の道なんだ、プロセスなんだ」とずっと言われてきました。ボランティアはする側される側ではないと。上野谷先生も「助け上手・助けられ上手」が大事であり、研修などの学びで助け上手になれるけれど、助けられ上手になるのはすごく難しいと以前から言われています。

助けられ上手はケアリングコミュニティを考えていく上で大事な視点です。

制度や社会福祉法がどう変わったか、仕組みはどうなったかというだけではなくて、私たちの意識が変わっていかないとおそらく地域共生社会は実現できないだろうと思います。それは福祉教育においても大事なアプローチになると考えています。

地域生活課題を考える

意識を大事にしながら制度について触れます。地域共生社会の仕組みをつくる上で一番のコアになるのが「地域生活課題」の考え方です。

ポイントは三つあります。

一つ目は、個人だけではなく世帯が抱える課題として捉えます。

二つ目は、福祉介護予防が保健医療のみならず、住まい、就労、教育も入ってきています。

三つ目は、地域社会からの孤立の問題、社会参加の機会の確保です。

これらを含めて地域生活課題という新しい枠組みが社会福祉法の4条の3で提起されました。この地域生活課題をどうアセスメントするかはとても難しいと思います。今までのような個人だけではなく、世帯、さらに地域のアセスメントをしないと、孤立や社会参加の機会は見えてきません。それを把握して連携して解決をしていくことが大事であるということです。

具体的なところで皆様方に関わるのは106条の2 事業者の責務です。

地域の子育て支援拠点事業はじめ、介護保険での地域支援事業、あるいは障がい者の地域生活支援事業等の事業を行っているものは事業者の責務としてはこれからその地域生活課題の解決に努めなければならないとしています。

具体的には8050の問題で今までは介護保険で80の支援をするのが本来業務であり、50の問題は関係なく見て見ぬふりをしていたとしたら、106条の2の違反ということになります。50もしっかりと支援をし、しかるべきところにつなげないといけないわけです。

重層的支援体制整備事業の展開

このつなぎ先を整備するのが106条の3で、市町村が包括的支援体制を整備し、地域づくりや丸ごとの相談や多機関連携をシステムにしましょうということが描かれています。ここにお金と人と事業を展開できるようにするのが、106条の4の重層的支援体制整備事業であり、今年の4月に始まった事業です。

「相談支援」「参加支援」「地域づくりに向けた支援」は、まさにミクロからメゾ、そしてマクロまでを連続し、お金と人をつけながら一体的に事業化していく、それが重層的支援体制整備事業です。

ここにソーシャルワーカーが深く関わっていくことへの期待と役割があります。

＊ケアリングコミュニティ　福祉サービスを必要とする人を社会的に排除するのではなく、地域社会を構成する一人として包摂し、日常生活圏域の中で支えていく機能を有しているコミュニティのこと。

ふだんのくらしのしあわせ

そこで大事なワードとなるのが、「ふだんのくらしのしあわせ」です。

「ふくしって何?」って聞かれて、自分の事、私の事って答える子はいない。それはいまどきの子どもだけでなく、親や社会もそうです。いまだに「福祉＝社会的な弱者を助けてあげる」というイメージがあり、他人事であり我が事にはならない。

ではどうしたら我が事として福祉をとらえられるだろうかという議論の中で、ある当事者たちの発言から出てきたのが、「ふだんのくらしのしあわせ」です。

「ふだんのくらしのしあわせ」の主人公である僕自身、私自身が、毎日の生活が幸せであるために家族がいて、学校の友だちや先生、地域の方たちがいて……というように私発で福祉を考えていくことです。

制度や仕組みは漢字の「福祉」ですが、「ふだんのくらし」って捉えられないだろうかと。「ふだんのくらし」はノーマライゼーションも含まれ、憲法25条の生存権であり、「しあわせ」とはまさに憲法13条の幸福の追求権です。我々の先輩たちが作り上げてきた「ふだんのくらしのしあわせ」は、憲法25条と13条の意味合いを我が事として捉えたものです。

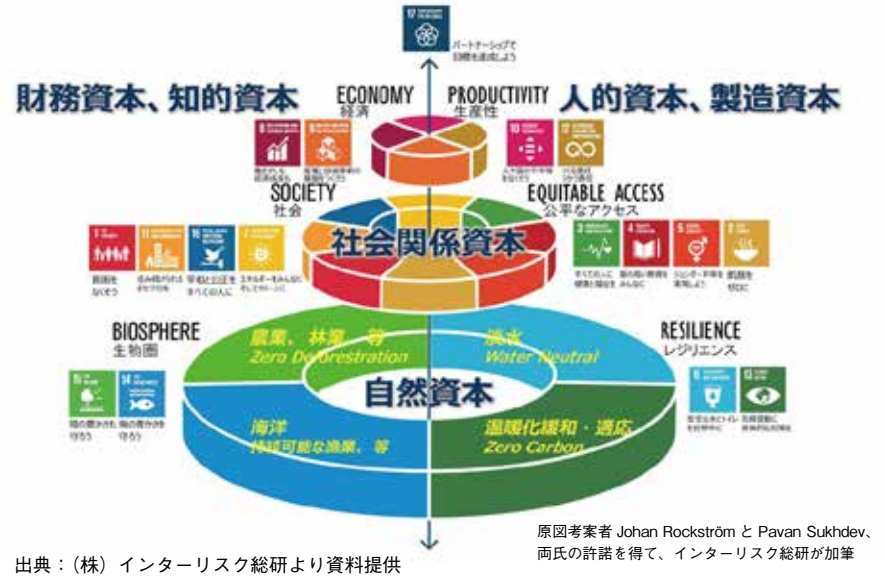
「ふくし」の反対語ってなに?

7年ほど前に「福祉って何だろう」というある小学5年生の授業を拝見したときのことです。どんな時に幸せを感じるのかという授業で、担任の先生が「福祉の反対語は何?」と子どもたちに聞きました。

すると一人の男の子が「戦争」って答えたのです。私はゾクゾクと鳥肌が立ったことを覚えています。

「ふだんのくらしのしあわせ」の反対語はまさに「戦争」で、平和と民主主義に基盤があるから福祉が成り立っている。とかく私たち福祉関係者はついサービスだとか、支援のことを考えますが、その根底には平和と民主主義があるのです。

上野谷: 原田先生が話された制度、政策の流れをきっちり踏まえていただきたいと思います。次に新田さん、お願いします。



出典:(株)インターリスク総研より資料提供

原図考案者 Johan Rockström と Pavan Sukhdev、両氏の許諾を得て、インターリスク総研が加筆

図2 SDGsの各目標の位相を示した「ウェディング・ケーキ」

◉ S D G s の 本 質 ◉

制度を考える上で重要な第3の領域

新田: 私は、NPOが社会に定着するともっと良い社会になると民間企業から転職し、日本NPOセンターに勤務し、現在はSDGs市民社会ネットワークで活動しています。

社会には企業でも行政でもない第3の領域があります。社会福祉法人や協同組合、様々な医療法人、宗教法人、政党、町会など非営利と言われている組織や団体、特定非営利活動法人(通称:NPO法人)もこの領域の中のごくごく一部分です。私たちが生活し、どういう立ち位置で制度を考え作っていくかという時に、この第3の領域が重要だと思っています。

世界経済フォーラムによると、世界中の国や企業が持ってる資産を1位から100位まで並べたら、半分が民間企業です。一つの国全体の資産を一つの企業が超えているということです。一部の富裕層が大きな意思決定をし、世界中の人々の意思決定に大きな影響を与えているという現実があります。だからこそ、第3の領域である私たち側が、企業には大きな社会的責任があると声を上げる必要があります。

企業や政府、自治体がどうしてSDGsに取り組まなければならないかというと、

SDGsの本質

1. 環境・社会・経済の持続不可能性を受け止める
2. グローバルとローカルを分ける発想を、つながりの発想に転換する
3. 普遍性と多様性を「持続可能な開発」という視点から理解する
4. 「目の前の課題解決」から「未来に向けた価値創造」に向かう
5. SDGsの達成を当事者として受け止め、「参加」から「参画」を促す
6. 「評価」を私たちがする

経済活動が大きくなりすぎてしまい、社会や環境との程よいバランスのイメージを見つけられていないからだと思うのです。

SDGsはなぜ作られたか

SDGsは2015年に国連で採択された193カ国の政府間の合意文書です。

以前から研究者や環境活動家らが地球の氷が溶け出し、今の気候変動はこのままだと本当に解決できないと早くから警鐘を鳴らしてきました。さらに人口問題、貧困と格差の問題、大量生産大量消費という問題が私たちの生活を持続不能にしています。

世界全体でどうにかしないと、このままでは日本も世界も地球も持続不能だということを多くの人が実感し始めたのです。

地球本来のバランスを保つSDGsウェディングケーキモデル

図2のSDGsウェディングケーキモデル*は、スウェーデンのレジリエンス研究所が考案した、“SDGsの概念”を表す構造モデルです。

*SDGsウェディングケーキモデル　ウエーデンの研究所が考案。最下層に環境門問題や気候変動といった「自然資本」をベースに、中間層に「社会関係資本」がある。最上層に経済はその上に乗って、頂点には目標17 国や企業をはじめとした全世界の人々がパートナーシップを組むことで、持続可能な社会を作り上げることを目標にしている。

「経済圏」「社会圏」「生物圏」のそれぞれの層において果たす役割を、世界中の国や人々が理解し、活動していかなければ目標は達成できないという三段構造になっています。「自然資本」をベースにすべてが乗っており、私はそのことを忘れてしまった瞬間に様々なものが崩れてしまうと考えています。

それぞれの専門領域でできることに取り組む

SDGsジャパンではコロナによって顕在化したいくつかの課題を発表しています。これらはすべて人権に関わる課題であり、人権の確立と暮らしやすさの両立はSDGs達成に決定的に重要です。ですのでもっと皆さんそれぞれの専門領域で関わっていただけることがあるのではないかと思っています。

日本はGDP世界3位の経済大国でありながら、ジェンダーギャップ指数は120位、政治参加では156カ国中117位。保健医療の分野では65位です。ウェルビーイングとは何かを真剣に考えてしまいます。

SDGs取り組みのポイント

●169の個別ターゲットと244の指標

SDGsは、全世界共通で17の目標のほか、169の小目標と、242の指標が設定されています。東南アジアなど海外からの介護の実習生と一緒に仕事される時にも共通言語になり得るところが可能性の一つとして面白いと思ってます。

●ムーンショット

SDGsに取り組む際に必要なのがムーンショットです。ムーンショットとは、1961年、アメリカのJ.F.ケネディ大統領が「10年以内に人類を月に送る」と宣言し、そこからすべてのものを結集させて、8年後人類を月に送り込むことに成功しました。

SDGsは15年間で達成する目標の束です。15年間といった時に、ムーンショットの考え方で取り組むことが大切だということです。2030年までにこうすると決めたら、そこに資源・ヒト・モノ・カネを投入する。SDGsの目標でしたら2030年までにはジェンダー平等にするとか、あらゆる場所の貧困をなくすといったところから始めることができると思います。

新田英理子 氏

例えば、トイレは LGBTや多様性の観点からすると、全部個室にすればいいといったように発想を転換し、物事を変えていくことが大事です。

●三方よしから五方よしの発想へ

SDGs的発想では商売についても、売り手よし買い手よし世間よしの三方よしの発想からにプラス2、子や孫によし、地球にもよしという五方よしの発想に変えていくことが重要だと思っています。

●実施のための主要五原則

SDGsには五つの主要原則があります。普遍性、包摂性、参画型、統合性、透明性と説明責任です。実施する時のベースにしてください。

●達成度合いで評価する

SDGsの達成度合いは目標ごとに色分けで世界の国を評価することができます。緑色は目標達成、黄色は課題が残っている、オレンジ色は重要な課題が残っている、赤色は主要な課題が残っている、を意味します。このように達成度を測れるのもSDGsの応用度の高さです。

2020年発表の日本の達成度合いは世界17位ですが、ジェンダー平等、気候変動対策、海洋資源、陸上生態保護、さらにパートナーシップまでも赤信号になっています。こうした評価も見ながら取り組むことが大切です。

上野谷：SDGsについて知っていること、知らない部分もありました。この差を平準化する作業が必要だと思います。

◉グリーン・ソーシャルワークと地域福祉◉

地域福祉の五つの論点

上野谷：グリーン・ソーシャルワークと地域福祉についてお話します。まずは地域福祉の論点です。五つあります。

一つ目は福祉国家が縮小し、地域福祉は民間の活動を重視するようになりました。公民民の関係性において、企業も含めた民間活動が大きな位置を占める地域福祉の時代に入っています。

二つ目には参加の単位としての「小地域」です。高齢化社会や障がい者の問題、子どもの問題など、暮らしの場を考えた時には生活者の圏域である少地域を重視しなければなりません。しかし小地域のつながりはすぐに潰れてしまうという弱さもあります。

三つ目は、「総合化」と「自立支援」の問題です。その中で私たちは権利行使支援を自立支援との関係でどのようにしていけばいいのかということです。

「総合化」「包括化」はある意味、権利行使支援に逆行する場合もあります。いわゆる包囲してしまうことになり、すべての権利を奪うような団体がネットワークを組んだら弱者は暮らしていけません。なぜネットワーキングするのか、どんな団体なのか明確にする必要があります。

四つ目はダイバーシティへの対応です。特に地域福祉の論点の中で関心の弱さがあります。

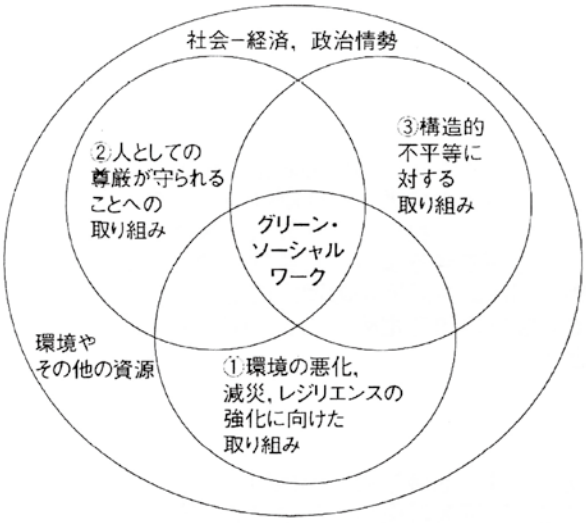
五つ目は災害多発社会への対応です。

参加と協働形態としての参加

これら論点において私は形態としての参加にこだわります。

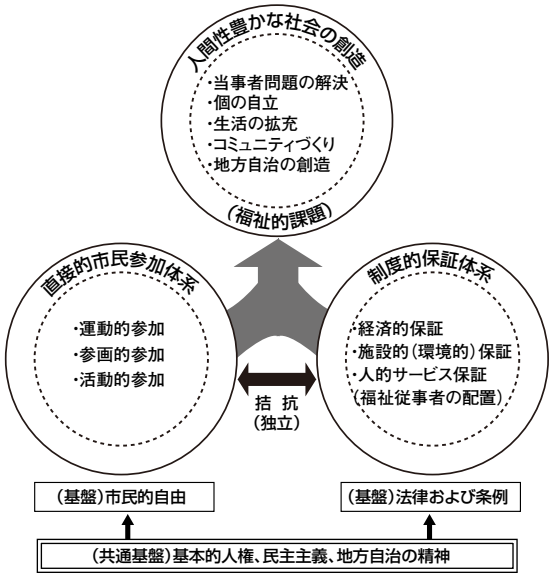
以前、研究で小さな事例の中から各国のソーシャルワーカーの取り組みを比較をしたことがあります。結果は文化や法の成り立ちも違いますので、関わり方も異なりましたが、共通していたのはいずれの国もソーシャルワーカーはみな正義に対して強い思いを持っていることでした。

一方で日本のソーシャルワーカーは心の中で思っていても発言の仕方などがおとなしい。他者へ訴える交渉力。物事に疑義を持って検討し、協議してみんなで一緒に動くことがなかなかできない。これ



参考：『グリーン・ソーシャルワークとは何か― 環境正義と共生社会実現―』レーナ・ドミネリ著　上野谷加代子・所めぐみ 監訳（ミネルヴァ書房 2017）

図３　グリーン・ソーシャルワークの概念図



出所：岡本栄一（1981）「ボランティア活動をどうとらえるか」大阪ボランティア協会編『ボランティア：参加する福祉』

図４　直接的市民参加と制度的保障の関係

では相手に伝わらないのではないかと思いました。それが我が国のソーシャルアクションの弱みと言えるかもしれません。

グリーン・ソーシャルワークとは

グリーン・ソーシャルは、環境ソーシャルワークのことではありません。人としての尊厳が守られることの取り組みと構造的不平等に対する取り組み、そして環境の悪化や減災、レジリエンスの強化に向けた取り組みの三つの重なる部分がグリーン・ソーシャルになります（**図3**）。

提唱者のレーナ・ドミネリ氏は問題提起を連続させ、論を展開していきます。

まずは災害です。災害は社会構造的にその被害を受けやすい人たちがいます。その人たちがどんな暮らしをしてきたのか、私たちはアセスメントしたことがあるのか、見過ごしてるのではないかと問題提起をします。

次にレジリエンス（回復力、復元力）です。逆境を跳ね返す力と外的な衝撃にも負けずに立ち直ることができる強さです。レジリエンスを高めることができるソーシャルワーカーは、被害を受けやすい人たちに対してその機能を活用しているかどうかです。

そしてコミュニティ開発をしていくときには、持続可能な経済が必要だとドミネリ氏は論じます。適切に経済を発展させないと貧困対策もできない。だからこれまでにソーシャルワーカーは経済に対してコミットメントしてきただろうかとさらに問題提起をします。

ソーシャルワークは世界を救う

ドミネリ氏はソーシャルワークこそ世界を救うという理論を展開しています。

著書の中では、ソーシャルワーカーが環境問題を見過ごしていることに対して危機感をもっていることに触れています。工業化や都市化の問題、汚染の問題、自然災害、気候変動、再利用可能なエネルギーと社会開発の問題、社会問題の解決、国家間の紛争、社会紛争、移民の問題など、みな今後ソーシャルワークの対象になっていかざるを得ない問題で、真剣に考え取り組んでいかなければすべてが解決しないと言及します。

ソーシャルワーカーは、そうした問題に目を背けず、直視し、観察力をつけながら、少しでも前向きに果敢に取り組む態度を養いなさいというわけです。

グリーン・ソーシャルワークはSDGsと非常に似ており、地域共生社会とは本来そうあるべきであると私も思います。

図4は「直接的市民参加と制度的保障の関係」岡本栄一氏の「ボランティア活動をどうとらえるか」（1981年）です。直接的市民参加と制度的保障は拮抗して独立しているけれども、それを協働して束ねることができるのは、ソーシャルワーカーが福祉的課題を解決していく時です。SDGsも同様だと思います

◉地域共生社会の実現に向けて◉

相互実現的自立について

上野谷：参加者から相互実現的自立はふつうの自立とどう違うのですかという質問をいただいています。

原田：今までの自立は、援助を受けなくなるとか人の手を借りないで自分で律するという意味合いでした。東京大学先端科学技術研究センター准教授の*熊谷晋一郎氏は、自立とはたくさんの依存先があることだと言っています。相互実現的自立は、依存は悪いことではなく、依存先があればあるほど自立は豊かなものになり、お互いが支え合いながら関係性の中で自立に向かうというイメージです。

SDGsの視点で取り組むソーシャルワーク

上野谷：私たちはソーシャルワークの機能を使いながらよりウエルビーイングの状況を作っていきたいと思っています。

グリーンソーシャルとSDGsとの視点からこれから地域共生社会を実現していくために、どんな考え方が必要でしょうか。

＊熊谷晋一郎氏　日本の医師、科学者。専門は小児科学、当事者研究。新生児仮死の後遺症で脳性麻痺となり、車椅子生活を送る。小学校・中学校と普通学校で統合教育を経験し、東京大学医学部医学科を卒業。2015年より現職。パートナーはアスペルガー症候群当事者の綾屋紗月で、共に障害者の立場から当事者研究を行っている。

＊サスティナブル・シーフード　将来も今と変わらずに魚を食べ続けられるよう、魚獲量や環境を配慮した、適切な方法で獲られた魚介類のこと。MSC（海のエコラベル）認証を取得した漁業で獲られた水産物、あるいは環境と社会への影響を最小限に抑えたASC認証を取得した養殖場で育てられた水産物などがある。

原田：ウェルビーイングを考える時に私たちは目の前にいるAさんやBさんの一人ひとりの満足度や充実感という主観的なウェルビーイングだけを考えてしまいますが、実はその一人ひとりの生活の背景にある社会や環境の中で私たちは生かされています。よって、SDGsやグリーン・ソーシャルワークのように、社会全体や環境のあり方を考える必要があります。

福祉関係者はSDGsの17のゴールのうち、福祉に直接関係する目標だけでなく、今目の前にある課題はそれぞれどんな関連があるのか、全体像をとらえる見方がソーシャルワーカーにとって大事なことだと思います。

新田：ソーシャルワークにおいてSDGsを取り組むのであれば、例えば支援が必要な方がどんなものを食べているのか、健康に良いと思われるものは何かなどに目を向けていただきたいです。自分の健康に良いものは地域の健康にも良く、地球の健康にも良いものです。またどんな仕事をすればその人がより健康でかつ地球にも良くなるのか、経済面にもアプローチをしていくと、より相互実現的自立につながっていくのではないかと思います。

まずは皆さんの食事のメニューを週に一回だけは*サスティナブル・シーフードにしてみませんか。毎日でなくても、できることから始めていただければと思います。

NPOとの連携、政策提言もっと気軽に参加と協働を

上野谷：地域共生社会実現に向けて政策的に重層的ということも分かりますが、越境して枠組みを超えることはできないものでしょうか。

原田：自分の理念と政策とを整理することがまず必要です。

政策とはそこに制度ができて、人やお金やあるいはその権限のようなものが生じてくるので、その制度をうまく活用することは大事ですけれど、制度だけで地域共生社会の理念が実現できるとは全く思いません。

地域共生社会の政策は、この20年間で地域福祉にうまくシフトしていると考えますが、制度としてでできる限界を見定めながら、それを超えるものをどう作っていくかは、ソーシャルワーカーの現場の知恵や働き方にかかっていると思っています。

上野谷：ソーシャルワークに対する期待について新田さんはいかがですか。

新田：制度を超えることをどう捉えるかという時に、NPO法人と連携し、協働することがあってもいいのではとは思っています。

制度云々よりも、例えばその人が来週ちゃんと学校に行きたいという気持ちになるかどうかということの方が大事です。

課題に合わせて制度を適用する際、その狭間にいる人々をどれくらいこちら側に引き込めるかです。それが*アドボカシーやロビイング、政策提言だと思っているので、政治参加を難しく捉えないことが重要になっています。会話の中で政治や経済の話題にふれたり、参加したりすることで感度を磨くことができるのではないのかと思いました。

上野谷：SDGsや地域共生社会の中で、あらゆる参加があることも考えていただきたいと思います。

例えば障がいのある方や脳性麻痺の方たちが選挙に行きたいと言った時や、認知症の人の投票はどうするのかも考える必要があります。地域福祉の実践者としてやれることはまだまだあります。

SDGsは達成できるか

上野谷：皆さん方から「SDGsは現時点で日本で達成できる見込みありますか」「流行で終わらないように願います」といったクールなご意見も頂いてます。

新田：「*SDGsウォッシュ」と言われるようにSDGsの本質を捉えず上っ面だけをなでる企業もありますが、それを許すか許さないかは市民一人ひとりの問題です。

SDGsの目標を2030年までに達成できるかどうかは私たちに委ねられています。あと9年です。9年前の2012年に皆さんは何をしていたでしょうか。その後、社会は大きく変わったと思いませんか。つまり9年で変えることはできるのです。だから私たちも達成できると信じて取り組んでいきたいと思っています。

福祉関係者にとっての持続可能性とは

原田：お話を聞いて、一人ひとりの暮らしを見直すことと同時に、福祉関係者も社会福祉法人の経営方針や社協のあり方を考える時に、持続可能性がある運営とは何か、法人はどうあるべきなのかを、福祉関係者の組織のことも考えることにつながっているのではないかと思いました。

新田：制度と意識変化はセットです。NPOの活動も理念も大事だけれど、稼がないと活動が成り立たない。SDGsを達成する活動も同じです。

順番や入口はどこからでも良く、足りないところは他の人にやってもらうこともできます。「助け上手・助けられ上手」のように、それぞれの得手不得手を補い合えればいい。経済のことが疎ければ、企業の人と組めばいいのです。私は経済界の人が何を考えているのか知るために日本経済新聞を読むようになりました。そんなことからでも異種格闘技戦を始めるのはとっても大事だなと思っています。

越境活動のすすめ

上野谷：滋賀県社会福祉協議会の縁創造実践センターで、えにしアカデミーを創設しました。私は学長として越境しています。そこではこれから新しく面白いことをしていくために3分の1理論を取り入れました。1/3は大学の先生、1/3は現場から講師になっていただく、1/3は政策をつくる側の人です。

けれどもお金は必要です。稼がないと福祉は実現しませんので、最近は私も企業家の方々と親しくしてロビー活動をしています。皆さんも越境活動をしましょう。いろんな人と仲良くなって、そこから吸収しましょう。

以上でシンポジウムを終了します。ありがとうございました。

＊アドボカシー（英：advocacy）　「擁護・代弁」や「支持・表明」「唱道」などの意味を持ち、同時に政治的、経済的、社会的なシステムや制度における決定に影響を与えることを目的とした、個人またはグループによる活動や運動を意味する。
＊ロビイング　主にアメリカや EU で盛んな活動として知られ、主に企業が利益団体から、自国政府や国際機関に働きかけをすること。活動などを展開するうえで有利になるよう、政策決定に影響を及ぼしたり、ルール形成を働きかける。
＊ SDGs ウォッシュ　SDGs の本質とねらいを理解せず、本気ではないにもかかわらず、表面的に自社の活動によって SDGs に取り組んでいるふりをする、すなわちうわべだけの SDGs 活動を指す。

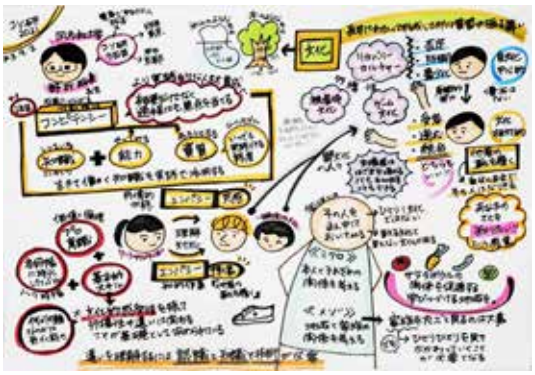
演習

演習Ⅰ ソーシャルワーカーのクリティカルシンキング

ソーシャルワーカーとしての視野を広げるために

野村 裕美 氏
同志社大学
社会学部教授

ケースの発見をする際、ソーシャルワーカーは今後ますますアウトリーチという方法を用いることが増えるでしょう。訪問した先では、そばに先輩がいてもいなくても専門職としての役割を発揮することが求められます。ソーシャルワーカーは、取り組む課題は何かを認識し、その時の自分の力量を把握した上で、自分で思考し最善の行動をとらなくてはなりません。そのためには、物事を鵜呑みにしないで考えたり、俯瞰して捉えたりすることができるクリティカルシンキングを身につけることが求められます。今年の研修では、「他者の靴を履く」(他者視点取得) をテーマに、ソーシャルワーカーの保持すべき力であるコンピテンシーを意識しながら、参加者と集い討議する中からそれを互いに発揮しようとする状況を疑似的に作り、体感していただく事例学習に取り組んでいただきました。



演習Ⅱ 地域のみんなで助け合うとは…

住民の学びと福祉教育を考える

加山 弾 氏
東洋大学
社会学部教授

今回のコソ件では「福祉教育」をテーマに話をさせて頂きました。肩ひじ張らず、身近に感じられる素材を用いて福祉への「入口」(きっかけ) を提供するのが福祉教育だと思います。

考えてみれば、私たちもそれぞれ心の琴線に触れる何か (きっかけ) があり、福祉の世界に入ってきたのではないでしょうか。

そのきっかけを、私なりに「甘口」「辛口」と表現して示しました。前者は、福祉を通じた人との温かいつながりや出会い、自己の成長や達成感等。後者は、世の中に溢れる理不尽な事象への怒りや悲しみ、解消したい不安等。それらの問題発生や解決が展開する空間を「ミクロ・メゾ・マクロ領域」で捉える視点についても提起しました。

演習Ⅲ 創造力と交渉力

ソーシャルアクションの機能を高めるために

原田 正樹 氏
日本福祉大学
社会福祉学部教授

ソーシャルワーカーには、2つの「そうぞう力」が必要だと言われます。想像と創造です。その際に求められるのは、豊かなコミュニケーションです。何か実現していくための交渉にあたっては、合意ラインを明確にしておくこと、信頼関係を構築すること、相手の話をよく受け止めること、自分の望みを的確に伝えること、が大事だとされます。まさにコミュニケーションです。

今回の演習では、ソーシャルアクションとして周囲の関係者に働きかけていくことを想定して、どう「物語」をつくっていくかを考えました。相手に伝える、社会に伝える、そのときにこちらの意図をどう伝えるか。今回はナラティブな共感と納得を得られるように、6つの段階を追って考えました。これは最近注目されているコミュニティ・オーガナイジングという手法を参考にしています。一人ひとりが実践を通して社会を変えていきましょう!

特別講義・演習

フューチャーデザインとソーシャルワーク

未来人になって考えるこれからの社会と価値

井上 信宏 氏　信州大学 経法学部教授

ソーシャルワークはすべての人の自由を援助する

私が研究している社会政策とは、個人の力では解決できない社会問題を社会全体の取り組みで解決し未然に防ぐ公共政策の体系のことです。皆さんに関係するものでは医療保険や介護保険、社会福祉があります。

しかし、社会政策は万能ではなく、政策を積み上げてもすくい取れない問題のなかで、人は懸命に暮らしています。

ソーシャルワーカーは、社会政策がすくい取れない社会問題に直面する人たちに寄り添い、援助するプロフェッショナルです。私は、当事者だけではなく家族や地域の人も含めて「ソーシャルワークはすべての人の自由を援助する」と定義すると共に、ソーシャルワークの目的だと思っています。

それを実現するためには今の社会システムをきちんと見直す作業が必要であり、その手法の一つ*フューチャー・デザインとソーシャルワークは接点を持っていると考えています。

フューチャー・デザインとソーシャルワークの接点

図は県社協の資料でも採用されているソーシャルワークの活動の射程とミクロ・メゾ・マクロの環境を描いたものです。ソーシャルワーク専門職のグローバル定義と突き合わせて考えると、極めて重要な視点が出てきます。それはフューチャーデザインの考え方と重なると同時に社会政策の考え方と重なります。

ソーシャルワーカーは日々の相談援助の中でどうしても近視眼的になりがちです。コロナ禍の今だからこそ、「社会を考えなければならない時代」を実感できるはずです。フューチャー・デザインによってソーシャルワークをクリエイティブなものにしていただきたいと思います。

持続可能性の問題は現代世代と将来世代の利害対立

新田さんのSDGsの話にあったように持続可能な社会を考えた時、今の私たちの社会システムは一人も取り残さない共生社会には程遠いところにあります。

持続可能性の本質には、私たち現代世代とまだ生まれていない将来世代の間の利害対立があります。将来世代の資源を全部奪い尽くして、それを元に今の豊かさを享受してるのが私たちの社会だと言えます。すべてのツケを先送りしてるのが今の社会システムなのです。将来世代は現代社会において最大の被害者なのです。

そこで何が必要かと言うと、政策形成のプロセスにおいて将来世代の視点で現在の社会システムを変革するという発想です。それがフューチャー・デザインの基本的な考え方です。

将来世代を現代に呼んでくるために、役割演技（ロールプレイング）を用いて、今の私たちが仮想将来世代になりきって政策を議論します。ここでは、若い人よりも高齢者、経験に満ちた方の方がはるかに簡単に将来世代になりきることができます。なぜかと言うと、60代70代だと、30年後はたぶん自分はいないだろうなと思った瞬間に現代からのくびきが全部切れてしまうからです。

従来のようなワークショップではどう

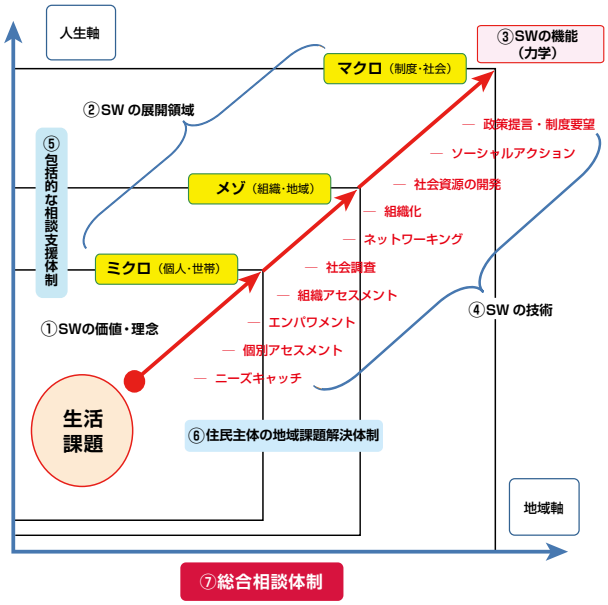


図 ソーシャルワーク / ソーシャルワーカーの活動射程

＊フューチャー・デザイン　環境問題、人口問題、社会保障問題など、従来「持続可能性」の視点から解決策が模索されてきた各種の問題に、「世代間利害対立」を新たな視点として導入し、社会科学を主軸にして各関連科学分野を連結しながら、科学的研究と同時に社会実装の方法を創出する研究のこと。西條辰義氏が提唱し、信州大学経法学部でもフューチャー・デザイン研究センターを組織して社会実装と研究を推進している（2015年度～）。手法はワークショップなどとセットになって展開し、参加する市民に将来世代になりきり、将来世代の視点から妥当な政策をデザインする。

しても短期的で個人消費的に考えがちですが、将来世代の人たちになって出された意見は、近視眼的なものの見方を脱却するようになり、社会的投資を考慮する方向にシフトしています。こうした思考変化がこれからの持続可能な社会を考える上では非常に重要だと思っています。

特別演習

「将来世代」になって、未来のソーシャルワークを考えよう

現代世代のソーシャルワーカーが考える地域生活課題

それでは演習に入ります。まず将来世代になるための準備で、現代世代として課題に回答していただきました。

課題1では、皆さんが利己的なのか社会的なのか、行動の特性を知るタイプ分けの質問でした

課題2では、「あなたにとって想像することが難しい未来とは、今からどれくらい先のことか」を答えていただきました。1年後の人、自分が定年する30年後と考える人、未来といえば100年以上先を考える人とバラバラでした。つまり未来の人になる場合、どこに飛ぶかが分からないし、飛んだ先でどんな未来を見てるか、全然違うということです。

アメリカのイロコイ連邦では、大切なことを決めるためには7世代以上先の未来を慮る方法が採用されていたそうです。また、人には共感力や感応する能力があり、それは遺伝的に継承され、育てることができる。つまり私達はトレーニングを重ねれば利他的なマインドを少しずつ変えることができることも最近の研究でわかってきています。

課題3は、2021年のあなたが気になっている地域における生活課題を挙げてもらいました。

課題4、5では、1970年から2021年まで50年間の社会福祉の制度や政策、長野県の社会福祉に関連する動きをまとめた年表に目を通して、感じたこと、考えたことを書き、意見交換をしていただきました。

その中には「**昔からあるように感じる程身近な制度だが、長年の尽力の賜物であると感じた**」という意見がありました。今その時そのものだけを見るのではなく、その源を考えていくことがソーシャルワークの大切な視点だと教えらます。

また、こうした捉え方がフューチャー・デザインの考え方であり、過去にこんなことをしてくれたから今の私たちが豊かなソーシャルワークの実践ができているということに気づくと思います。

将来世代ワーク 体験版

それではそろそろ未来に飛んでみましょう。ここから皆さんは2021年の年齢と職業のまま、50年後の2070年に暮らしてる未来の人になります。将来世代として回答や発言を行ってください。

回答を送信すると、画面には、ほかの仲間が書き込んだ回答が閲覧できます。「なるほど／いいね」と思える回答にはボタンを押してください。

……

課題6-①：2021年当時「母子家庭の貧困」は、は大きな社会問題の一つとして考えられていました。母子家庭からの相談は2070年には、2021年と比べて増えていますか、減っていますか。

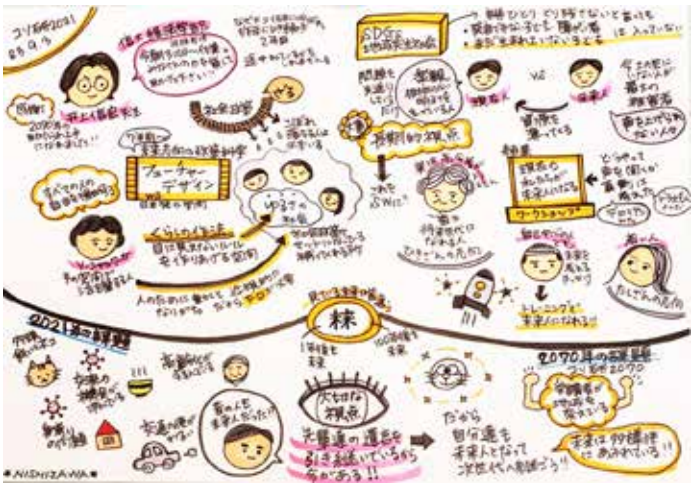
課題6-②：なぜそうなったのか理由をお答え下さい。

……

いかがですか。皆さんの回答の結果は、「**減っている**」46% 、「**増えている**」36%、「**あまり変わらない**」19% でした。

「いいね」の人気順の回答は、「**減っている：宇宙で暮らしているので地球上の貧困は無くなります**」(18)、「**減っている: コソ研の研修を受けた私たちがなんとかしようとするから**」(13)、「**減っている: そもそも貧困はない。母子家庭という概念がない**」(10) ……。

2070年には母子家庭からの相談は



井上先生のコソ研用公開サイトより

＊この特別講義・演習では、プラットフォーム・サイトを利用し、レジュメ・参考資料の閲覧、演習の各課題への個人ワーク・回答結果の閲覧、受講者同士の意見交換などのグループワークを行った。

減っている姿が私たちの目の前にあるようです。それは先輩たちがいろいろな取り組みをしたから、あるいは社会が大きく変わり、新たな状態に変わったのではないかなと考えられます。

課題7：2021年当時のソーシャルワーカーが考える地域の生活課題一覧表があります。2070年にはこれらの課題はどうなっていますか。

「いいね」の上位回答です。

「つながり：仮想空間内で授業を受け、サロン活動が行えています。お気に入りのアバターで年齢、性別等を超えた交流が盛んです」（11）、コロナ：コロナを境にソーシャルワークの考え方は大きく変わった。ズームは当たり前に、感染対策は普通のエチケットに。知恵を寄せ合い、助け合って生きている」（11）……。

課題8：2070年の私たちソーシャルワーカーは、社会を変えるために、どのような活躍をしていますか。

上位回答は、**「縁側でとなりのおじいちゃんとお茶しています」(14)、「ワンピースのルフィ海賊団や鬼滅の柱たちのように仲間たちと大活躍！」(8)、「困っている人の心の声が聞こえるようになってる」(7)、「学校教育で福祉に関する授業が重要視、ソーシャルワーカーが授業を受け持っている」(7)、「変わらず、小さな事から一つ一つ解決を目指し、動いています」(6)**……。

人気のトップが定番なのは泣かせます。居場所の価値の大きさを改めて感じます。そして皆さんが見る2070年の未来は多様なんですね。最後に2070年の仲間として意見交換をしてください。

皆さん、未来からおかえりなさい。心の中にあるモヤモヤが解放されましたでしょうか。フューチャー・デザインとソーシャルワークのつなげる初めての取り組みでした。ありがとうございました。

レポート

多機関協働・地域連携の進め方

～いつも あなたと ともに～

西澤 智美 氏
箕輪町社会福祉協議会
地域ふれあいグループ
地域福祉コーディネーター

連携は相手を「知る」ことから始まります。“あなたの事をもっと知りたいです”というメッセージを、個人・地域住民・専門職、誰に対しても同じように発信することで、様々な「つぶやき」が返ってきます。

その「生もの」を腐らせないようにとSWの「ほっとかれへん」が発動します。私は、地域に居場所を作る時も会議を開催する時も、「つぶやき」を「わかりました」と一旦受け止め、できる方法を考え、とりあえず知っている人と物と場所につなげる事とつなぎ直すための和文和訳を行ってきました。

これからも、未来人の視点を持ち、組織と地域に足を運ぶ事で仲間と応援団とアイテムを増やし、ワクワクドキドキの楽しい航海を続けていきます！！

“S育てようみんなで　D誰もが自分らしく　G元気に暮らせる地域　S社会を”

クロージングナラティブ

上野谷 加代子 氏　同志社大学 名誉教授

野村 裕美 氏　同志社大学 社会学部教授

野村　ソーシャルワークはその人の感性や何に価値を置いているのか、その人の在り様そのものが実践に影響していきます。未来を見据えるために私たちは自己の強みをしっかり知る必要があります。

自分を見つめて行動の変化に結びつける深い気づきを得るために、この三日間で自分が価値を置くべきものは何だったか、何を大切にしていくのかを振り返っていただきたいと思います。

上野谷　得た知識やエネルギーを持続させることはとても難しいことです。そのためには一週間に一回は思い出すことです。自分が記述したものをもう一度読み返し、涙したり怒ったり笑ったり、そして仲間と連絡を取ったりしながら持続させ、次の年を迎えます。そうしないと、力は持続できません。そういう意味で助けられ上手になってください。

「ひたすらなるつながり」。私はこの言葉が大好きです。必死になってつながりましょう。つながろうと思わないとつながりません。皆さんがこの研修に参加したことを通して、何らかのご縁で講師の方々ともつながりました。そして参加者ともつながったと思います。そのつながりを大事にしていただき、今年度の研修を修了します。

受講者の事後課題より（抜粋）

自分たちの仕事もこれからの日本や地域、世代そして地球全体の未来につながっていく大切な役割を担っているんだなということを実感しました。

全体を通じ1本の太いシンがあり、イントロからエンディングまで、すばらしく計算され、心躍らせワクワクしながら楽しく参加できました。

コロナ禍ということもあり、個別支援は増加している反面、地域支援が停滞しているという状況でもあり、なかなか思うような実践ができず葛藤の毎日ですが、本研修を受けたことにより、多くの〝気づき〟と〝学び〟溢れんばかりのエネルギーを頂き、大変励みになりました。

人々の生活が連なってできている社会に、生身の体で道具ももたず対峙できるソーシャルワークは、本当におもしろくてやめられない、そんな感想を持ちました。

3日間、どこでも味わえないような講師陣の研修を受けられたことは、まず驚きと感謝です。実に楽しかったし、力をもらった様な研修でした。ただの座学でなく、物語風でオンラインの長所もあり実にライブに行った感じです。こんなに知的興奮を覚えた研修ありません。

ミクロから始まるソーシャルワークをメゾ、マクロへつなげられるよう専門職として人々とつながり、越境活動していきます。とても楽しく、学びの深い心温まる3日間の研修でした。

受講証 交付者62名

研修を通して、「想像から創造へ」「私の問題を私たちの問題に」、個別支援から仕組みや運動に繋なげるというメッセージを強く感じました。

ミクロ・メゾ・マクロのそれぞれの視座に立って捉えていくことで、個別支援者と地域支援者の間に生まれる齟齬が少なくなるのだろうと感じました。そもそも、個別支援と地域支援は一体的に連動しているものだと思いますが、支援者側の視座が違うことによる視点や視野のズレを感じることがあります。研修が進むにつれて、その理解が深まり、ミクロ・メゾ・マクロのつながりと循環が明らかになる研修内容でした。

SDGsのように地球規模で物事を考え、行動していく大切さや、フューチャーデザインで学んだように、未来から今を見つめるという発想の転換により、広い視野で捉える大切さや、自分で自分を追い込まない支援、1人で頑張らなくても支えてくれる仲間を作ればいいのだという安心感も得られました。

Special Thanks

協 力

一般社団法人 日本ソーシャルワーク教育学校連盟

社会福祉法人 長野県共同募金会

公益社団法人 長野県社会福祉士会

令和 4 年度 コソ研・長野 2022 開催のお知らせ

開催日 令和4年 8月31日(水) ～9月2日(金) 予定

会場 RAKO 華乃井ホテル（諏訪市）

2022 年 3 月発行

編集・発行：社会福祉法人 長野県社会福祉協議会

〒380-0936 長野市大字中御所字岡田98番地1 長野保健福祉事務所庁舎内

TEL. 026-226-2035 FAX. 026-291-5180

http://www.nsyakyo.or.jp/